



「多から発信！SDGs」

「子どもたちを笑顔にする

学校給食をめざして」

多から市や佐賀県には、全国に誇れる産物がたくさんあります。この恵まれた地場産物を活かした給食を心がけ、成長期に欠かせない栄養量の確保はもちろん、苦手な食材を子どもたちが食べてくれるように工夫した献立を考えています。

また「お誕生給食」「食育の日」「リクエスト給食」など、様々な給食を通して子どもたちに食への興味・関心を高めてほしいと思い、給食を実施しています。

学校においては、給食時間に各クラスで、食に関する指導を行ったり、学級活動や家庭科等の授業に学級担任等と連携し、授業に参画したりしています。

他にも、多から市において後期課程生徒を対象にしたスポーツ栄養教室やファミリーサポートセンターの養成講座で講師としての機会をいただきました。栄養教諭として講話や調理実習を行い、皆様のお役に立つと共に学校給食への理解も深めることができました。

これからも「子どもたちを笑顔にする給食」をめざし、日々「生きた教材」である「献立」の研鑽をし「安全・安心なおいしい、子どもたちが待ち遠しくなるような魅力ある給食づくり」に努めたいと思います。

東原 祥含 中央校

栄養教諭
川田 孝子



▲川田 栄養教諭は、令和6年度第55回全国学校保健・学校医大会において、日本医師会会長表彰を受賞されました。

紫式部・和泉式部・小式部の物語 挿絵(11) 最終回

多から家資料「小しきふ小式部」を編集

『小式部(下)』挿絵11 小式部が活躍する話(2)



小式部が詠んだ「ことわりや」の歌の力で小松が生き返り、御門から褒美の宣旨がありました。



次の物語は、小式部の名を高らした内容で、『古今著聞集』や『十訓抄』など多くの著作に採用されています。

御門が寵愛された小松が枯れ、これを惜しまれ、「神も草木も歌の道になびくと聞いている。和泉式部を急ぎ召して、松の祈りに歌を詠ませよ。」との宣旨がありました。和泉式部は丹後国にいたため、小式部の内侍が、「先ず私が詠んで献上します。」と奏上しました。「急ぎ詠んでみなさい。」との宣旨でしたので、小式部は参内し、「ことわりや かれてはいかに ひめこまつ 千世をばきみに ゆづると思へば」(道理で当たり前のことですよ 枯れてはどうするのですか 姫小松よ 永遠の命を帝にお譲りするのが あなたの役目だと思えますの)と詠みました。すると、小松は生き返り栄えたので、小式部は御褒美を賜りました。『挿絵11』

ところが、この和歌は母親の和泉式部が、娘の小式部のために送ったものだと、意地悪く言う人がおり、帝からお訊ねがありました。そこで小式部は「おほへ山 いくのさみちの とをければ まだふみもみず あまのはしだて」(大江山を通過して 生野へ行く道は遠いので まだ丹後国の天橋立を見たこともありませんし 母からの文も見ておりません)と詠み、帝は大いに賞賛されました。ですから、是非とも歌の道を嗜むべきですと、物語は締めくくられています。

※原本の挿絵は色絵になっています。郷土資料館に写真を掲示していますので、お立ち寄りの際にご覧ください。

多から市郷土資料館長 藤井 伸幸

市民文芸

短歌 《麦の芽短歌会 互選》

◆沈丁花 蕾をうけて春を待つ

私の心はあの日の上まで 梶原恵美子

◆山茶花の 一つ咲き初む裏庭に

この冬の灯のともる心地す 川浪 信子

◆中国の 訪問先での誕生会

あの時消せしは幾本なりし 尾形 節子

◆親切をすればするほど幸せに

満たされている 自分に気付く 野崎 隆幸

◆夜の明けぬ 園舎に灯点りあり

降り積む雪が 園児ら待ちいむ 浦野 嘉恵

◆菜の花や 色の深まる 黄八丈

おおやはな 本村 則子

◆冬晴や 新品の靴弾む音

寒鯛や 玄界灘の波の音 富樫 明美

◆耕しの 鋤につきたる 土落とす

寒紅を引きて心の灯を点す 武富 律子

◆大石ひろ女

言い勝つて心の中を風が吹く 松下 修

◆追いかけて 逃げられた恋し

やばん玉 大谷 和

◆鬼よりも 陥没恐れ 列島か

井上 東子

◆好運の 女神を連れて 孫が来る

高塚ちかこ

◆寒い寒い 私こたつで 石になる

田代まつこ

俳句 《大石ひろ女選》

川柳 《多から川柳会 互選》

◆寒い寒い 私こたつで 石になる

田代まつこ